



《ゆく水の家》2階 (011p 参照)



《ゆく水の家》1階、夏会期 (011p 参照)

椛田ちひろ「大地の芸術祭 2022」の新作

椛田ちひろは美術をめざしはじめたばかりの高校生の時分に教員の示唆によってマラソン距離と同じ 42.195km の線を引くためにボールペンを用いた。そして 2007 年以來、再びこの道具を主要な画材として用いている。そう言われて本人がどう思うか分からぬが、ボールペンによってうめつくされた画面は彼女のアイデンティティである。

これまで MOT アニュアル、VOCA 展と、活躍が期待される新進アーティストが選抜される登壇門的な展覧会を順当に通過し、その活動は円熟期に入ろうとしている。

近年では黒色以外のボールペンも使われ、従来から試していたメディウムや絵具を手指で直接支持体に塗布する方法も併用するようになっている。支持体は鏡面であることもある。最も多く使用される油性ボールペンの黒色とは決して単純な墨色ではなく、わずかな暖色を帯び、そこに藍色を寄せ合わせた複雑な色彩を醸している。更に特有の懐かしいような薬品的な臭気を放ち、それらがこの画面に漆黒とは別種の暖い深みを与えている。そこから明示的なイリュージョンは排されているが、手仕事の痕跡は修行のように躍動的、感情的であり同時に静謐さを混え、この表象が人間的な生の営為であることを思わせる。



《ゆく水の家》1階、春会期 (011p 参照)

画面には線や手の痕跡のかたちで必ず流動があらわれ、それは「流されゆく」ものごとを容易に想起させることにも留意したい。そうしてみると椛田の画面は、個々の生の在り様と、その生が時空によって外側から揺らぎ流され相対化されてゆく様相をあらわしてきたかのようなのである。

2022年に参加した「大地の芸術祭」で市ノ沢集落をサイトとした椛田は、集落を挟むように流れるふたつの河川、集落の人々を、旅人の視点から捉え素材とした。本紀要に掲載される制作ノートは、内省的な方法をとってきたかにみえる椛田が、おそらく初めて特定のコミュニティと能動的に係わった制作の記録である。椛田は2021年度よりアーティストであるとともに職業的な教育者であることを選択した。その職場は理想的な環境にあるとはいいがたいのであるが、いかにして後進たちというコミュニティに影響を及ぼそうとしてゆくのか、またそれも掛替えのない表現行為のひとつとなるに違いない。
(芸術学科・半田滋男)

かばた ちひろ：1978年福岡県生。東京都で育つ。2004年武蔵野美術大学造形研究科修了。国内では主にアートフロントギャラリーで多くの個展を開催。「MOT アニュアル2011「世界の深さのはかり方」(2011, 東京都現代美術館)、「あざみ野コンテンポラリー vol.2 Viewpoints いま「描く」ということ」(2012, 横浜市民ギャラリーあざみ野)、「現代美術の展望 VOCA 展 2012- 新しい平面の作家たち」(2012, 上野の森美術館)、「日本の美術を貫く炎の筆『線』」(2020, 府中市美術館)等に出品。



《ゆく水の家》2階 切り取られた壁から (011p 参照)

撮影：木奥恵三、
画像提供：越後妻有大地の芸術祭 2022